

兒玉花外集
詩集
天風魔帆

平民書房

本
文
D



天風魔帆

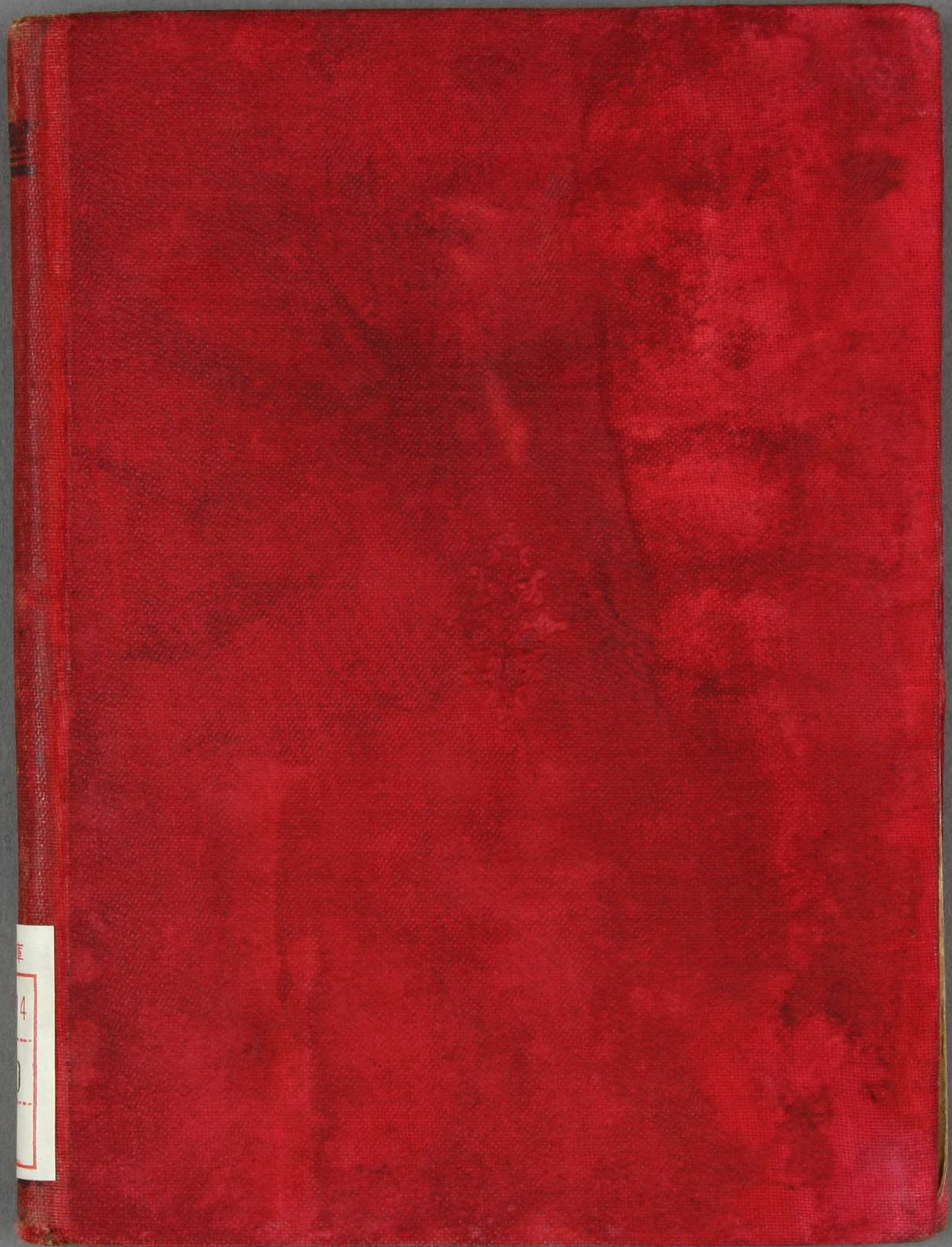
全

見五

本間文庫

文庫 14

D 190



4

見
屋
字
家



尹

年
十
月



兒玉花外作

詩集

天風魔帆

發兌

平民書房



文庫 14
D. 190





文庫 4
2100

目次

松露	五八
可憐兒	六一
雪女	六四
傷める鷗	六八
ラサールの死顔に	七〇
秋雲	七二
天露	七五
やまご花	七九
死出の湊	八三



苦熱	八五
越中島の朝	八八
感應	九一
遼東の墓	九六
鳥屋の娘	九九
火國	一〇二
新聞幼工の歌	一〇六
仇浪	一一〇
詩魔	一一四

詩と糸	一一七
海に走りて	一二〇
雲甕	一二三
秋思	一二六
詩人塚	一二九
春恨	一三二
海王	一三五
大鹽中齋先生の靈に告ぐる歌	一四二

天風魔帆

白帆に寄する詩

兒玉花外作

あゝ、大波おほなみのうねくや、

旭日あさひを孕はらむ金帆きんぱんは

七月ぐわつ、佐久さくの白百合しらゆりの

雲吹くもふく風かぜに揺ゆる如ごとし。

天風覽帆

聞け、赤銅の裸男、
浪も鎮まる火の言、
見よ、巖角に手を舞はし
た、長髪の人立てり。

驚く勿れ、漁夫の子ら、
大き丸帆にわが怒、
小き片帆にわが愁、
載せて駛けれや茫千里。

いかに其船、釣糸に
鯉、積んでは百石よ、
高き、美しを劍に獲む、
古今ぞ抜ける海賊ぞ。

陸在るきはみ、氷島や
舳の前に崩れ伏し、
魔帆むく影に諸々の

天風覽帆

船は逃るる鱗かな。

巖にたばしる熱血に、

波も躍りて今急に、

行方は知らじ、たゞ勝利、

いざや帆を張れ、

吾が胸のごと。

冬空

あ、あ、

冷々にけり、——わが胸や、

あ、あ、

乾れにけり、——わが感情。

雲は蔽ひて、光なき

冬空、泣くよ雪ひらら、

愁もよへどわが眸に

熱き雫の溢れ來ず、

人の心の秋寒に

濺ぎて涸れし泪かも。

人のこの世に影ぞ無き

『自由』『理想』を天上の

春に覓めつ御光に

涙流れて、萬斛の

露や盡きしか、憧憬に。

いま、哀の潮落ちて

火の目、黄泡の酒を呼ぶ、

酌めば、つめたき冬の夜も

顔もほ照らぬ恨みかな、

氷のうへに瑠璃の盃

薄き命を碎かむか。

神よ、悪魔よ、右左

(少女の姿、蛇の形)

來れ、詩人に新なる

さかづき満せ、血と涙、

世の悲よ、苦よ、毒よ、
 乾坤盛りて吞ましめよ、
 善悪、美醜、泡咲きて
 一つに戀の金の杯、
 男兒、唇接け酔ひぬべく、
 ああ、日の如く軀は焦爛れ
 天も、地ぞ無き渾沌に
 沈みて灰と消むむかな。

鶯と自由

朝日の光、花に照り
 心とさめく明窓に、
 聴くや鶯、梅が枝の
 花の世界に遊びつ、
 春を歌ふを吾れき、ぬ。

月も曇れる此の夜半に

獨り愁ひにさむる時、

『自由』の呻吟ぐ聲を聞く、

嗚呼、衰へて地につくか

死するが如き聲すなり。

松を刺して

ある日激するところあり

七首を抜いて松を刺す。

松は悲しき聲を上げ

雲にむかひて叫びけり。

たのが甲斐なき身を嘆き

天風宛帆

奸物殫す勇士の
歌をうたひて歸りけり。

世潮

牛の野河の
水を飲み、
人は都會の
毒を吸ふ。

隅田のほとり
草のみ座、

天風宛帆

天下清むと

花冠して。

日の輪はめぐり、

紡車、

われ挽回の

大てだれ。

洲なるよし葦

潮満てば、

葉莖ひたく

千雀啼く。

あゝ夕月や

雲を越わ、

瑞穂の國の

一人をも。

天風登風

時世の波瀾

いま胸に、

たちて哀しく

歌ふかな。

野の少女

ほのく明けし小百合野の

夢にた、すむ乙女子の

裾は露にぞ濡る哀れ、

昨夜、小草と添寝して

色やうつりし唇も

青きわもわの優乙女。

天風魔帆

天風窈窕

白しろき肌はだに世よの塵ちりの

衣ころも被かける貧まづし女めよ、

亂みだれ髪けわけて目めをあぐは

鳥とりにうつ、や翅つばさ影かげ、

朝あしたの清きよき蒼あなざら空らに

雲くもと消けばやと祈いのるらん。

高たかきは恨うらみ、雲くもよ鳥とり、

脛はざの下もとなるはかな草ぐさ

土つちにほこりて生いくれそは

なぞ人ひとひとり家いへぞ無なき、

袖そでを嚙かみての悲かなしさの

熱なみだ涙なに草くさの枯かれぬべし。

可か憐れんや君きみし狂くるふかも、

女をんなばかりにきびしかる

世よのならばしを籠かご鳥とりの

羽はねふる如ごとくいきごほり

天風窈窕

啼なきてや野のへは來こしか君きみ
 自然しぜんの子こなる優やさ少女なごめ。
 野のには人ひとなし、いかで君きみ
 み山やまに朝あさ日出ひでぬ間まを
 舞まへよ、歌うたへや、さまぐくに、
 百ゆ合り花りもゑむべし、蝶てふまはめ、
 視うかがふ吾われぞ木きの蔭かげを
 鹿しかの如ごとくに走はしり隠かくれむ。

木葉の使者

晝ひるは日ひ影かげに咽むせびつ、
 夜よには泣なくらむ月つきかげに、
 谿たにの岩いはま間まをいでしより
 花はなにも哭なきし野のの川かはの
 流ながれを下くだる一ひと葉は舟ぶね、
 末すゑは海うみかや——水みづの墓はか。

天風寛帆

岸に佇すみ、うち嘆く
わが悲哀を載せよかし、
人の心の戸やかたく
神の胸さへ鎖されぬ、
天と地とに海のほか
愁思送らむよしあらじ。

歡樂去んぬ枯し葉よ
げにふさはしの吾が使者、

永遠にかへらぬ海の門に
やさしの波の主とは、
ふるへつそれと答へよや、
頬青白き人の子と。

天風寛帆

祈 禱

昔賢むかしかしこき豫言者よげんじやが
 口吻くちぶりまぬは恥はぢあれど、
 愚狂ぐきやうわれ吾われにも嘆なげかるる
 腐敗ふはい、悲惨ひさんの世よのさまや、
 そこに道義だうぎの光ひかり消きへ
 あはれ人情なさけの花はなあらず、
 浮世うきよの風かせぞ腥なまぐさく

黒闇こくあん々の地獄ぢごくかな。

神かみの怒いかりのあらばいざ、
 天あめより墜たふせ斷頭だんとう斧き
 搖ゆるぎ閃ひらめき地ちの上うへに
 人ひとをぞ刈かれや草くさの如ごとく、
 罪つみこそ憎にくめ、大神おほがみよ
 火花ひばなの彈たまを彗星すいせいの
 飛とぶが如ごとくに投なげよかし、

苦界碎^{くがいくだ}けや、救^{すく}ひなり。

いづれの政府^{せいふ}、強國^{きやうこく}か

人^{ひと}の力^{ちから}のいかにして

神^{かみ}の肘^{ひぢ}をば制^{せい}しねん、

天^{あめ}のわざをやあげつらふ。

嗚呼^{あゝ}、秋鳥^{あきどり}の歌^{うた}にさへ

木葉^{このは}は落^おつれ梢^{こずえ}より、

吾^{われ}のこの歌^{うた}よわくとも

天^{あめ}の感應^{こたへん}のなかるべき。

柳を植ゑよ

柳やなぎを植うゑよ

天下てんかの大道だいたう

緑みどりの雲くもの

地ちに曳ひく如ごとく。

牛馬うしうまさあれ、

利害りがいに走わる――

市いちの子この衣きぬ

百苦ひやくぐに息いきふ。

春はるや黄きにもね――

垂たれたる絲いとは

天地あめつち結むすび

太平たいへいの影かげ。

雨風あめかぜなよび

濡れ立つ情姿、

柳絮飛んでは

満都の雪よ。

柳を植ゑよ

天下の坦道、

琴を枝懸け

歌ぞたゞよふ。

櫻は男、

柳は女、

二つ合せて

大和の花木。

旅に鷺を見てよめる

尾花は高く秀でつゝ、
岸に續ける枯蘆を
揺りて流る、大河や、
水にも似たる旅人の
吾は夕陽に佇みぬ。

遊子感慨に溢れつゝ、

聲に耳たて眺むれば、
汗と疲れの田の跡に
刈りし少女の影もなく
落穂を拾ふ鷺の群。

黄に青黒く美はしき
羽もつ君よ譬ふれば、
國より國と渡り行く
樂師の組に似たるかな、

幸ある方へ歌ひつゝ。

踊るか、沈むわが心、

荒みし胸をみすてつ、

往かんや、鳥と吾魂よ、

さらば別れむ永遠に

再び還ることなかれ。

緑、去りたる草のごと

われは仆れむ、安息の

故郷ごともあらぬ身ぞ、

鳥に恵みの神あらば

導きたまへ、わが霊も。

涙の河

秋あきの愁うれひに堪たへかねて
 ぶりさけ見みれば、大空たほぞらに
 今宵こよひか、れる雲くももなく、
 銀河ぎんが流ながれて明あきらかに
 天てんの不滅ふめつの螢火ほたるびか、
 光ひかりあふるるあまの川がは。

ああ、人ひとの世よの秋あきは常つね、
 み空そらに星ほしの川かはあらば
 地ちにぞ涙なみだの河かはあらむ、
 水嵩みかさや代々よよに増ますとても
 人ひとの目めつねに露つゆありて、
 見みれどもそれとわかぬのみ。

白・雲

(坪内孤景子を弔ふ歌)

國も愁へよ、人も泣け、

恨は長く草深き

大石橋の戦ひに、

少壯士官わが友の

命は敵弾に碎けたり。

遼東の野に砲煙たち、

詩神の裳に筆捨て、
國の賜びたる劍を把り
火踏み、血を越わ、敵を追ひ、
御國の爲に殞れけり。

波も激して日の本に
悲しき報知齋ちし時、
嘆きに吾や泣き伏しぬ、
神も運命も無情なる

天をば地も呪ひにき。

今宵は月の青白う

一片光る西の雲、

故國の空へ君が魂

雲に乗りてぞ慕ひ來し、

遺骨の郷にかへるるを。

三歳、早稻田の學窓に

詩筆研きし一秀才

劍は残りて人むなし、

花咲き鳥の謠ふとて

いつか聞かんや君が歌。

悲しき風に翼して

高きに消ゆる白雲よ、

やよ待て淋し。わが靈も

共に抱いゆけ、涙なく――

天風窺帆

春や霽れたる天つ國。

蛭へのねがひ

礁蔭さよき蛭少女、

青淵、波に沈む間を

旅ゆく吾と語らずや、

むれて歌へる白鳥の

首向く如くをとめらよ。

つぶらの眼に何怪む、

天風窺帆

生いくにね堪たへぬ熱情ねつじやうの
燃もゆる炎ほのほみの身みを、君きみよ、
思おもひなきさの鳥とりとなり
沈しづみて胸むねぞ冷ひやさなむ。

人ひとの情こころのさだめなや、
浪風なみかぜあらしき世よの海うみに
流ながれ漂たふふそれよりか、
貝採かひこる業わざにたちまじり

賤しづが安やすきを得ねなましを。

わが戀こひ、空そらの雲くも少女せうじゆ
浦うらをさまよふ風かぜの子こも、
散ちりてかつ咲さく波なみの花はな
ながめ歌うたひて樂たのまん、
白浪しらなみ、白髮しらがかつぐまで。

世よ捨て、馴なれにし塵衣ちりころも

海人のみけしと脱ぎかへむ、
眞珠こそ包めわが袖に
愁秘むべき、鹽濡づも
袂に涙しぼるかは。

やよ蜚少女、あはれまば
たゞ折れ蘆の柔態せね、
花ぞ凋みしわが魂に
男女をいはであれ、

君し黒髪長さばかりぞ。

本能寺の跡に立ちて

空は曇りて雨模様、
くもりがちなる胸擁き
われ弔ひぬ、本能寺、
此處や昔に信長と
彼の光秀の戦ひし
夢の跡かや、劍の影
炎もあらず、矢叫びも、

たゞ淋しげに雨ぞ降る。

壕はあらねど、光秀が
深き恨は幾尺ぞ、
梅雨冒して丹波路や
越えきし群を神や堰く、
稠座の中に罵しられ
眉間の血汐忍びむや、
世に逆賊どうたはるも

吾れ光秀に情を寄す。

頭回せば、この社會、

あ、信長や光秀や

さても似る人いま多し、

弱きは何の罪かある

花にもあらず地に踏まれ

血潮の河は流れたり、

起てよ、起たすや、起たざらば

嗚呼、千歳に恥辱あらん。

天人

光の潮ひかりうしほ

雲の濤ぞくもなみ

無窮に注ぎむきうそ

音もあらずねもあらず

高き天人たかてんにん

雲を踏みてくもをふみ

雪の裳ゆきぬいに

踵見えずかかとみ

日も夜も憧れひよこが

まなこ痛みいた

無邊の土むへんつちに

涙流るなみだなが

櫻、青葉さくらあざはに、

秋ぞもみぢ

雲の紅緑

四時廻る。

または顔白

長き髪の、

千人集めば

雲の如き。

あはれ、この雲

泥に似たり、

吾や掬ばむ

天の紫瑞。

双手舉ぐれど

露も墜ちず、

熱き瘦頬

嵐吹けり。

あらゆる翼つばさ

呪のろひ呼よべど、

雲くもへ到いたらじ

恨うらみ言葉ことば。

奈落ならくの海うみよ

炎吐ほのほいて、

重おもき肉體にくたい

蟻あまと溶とかせ。

されば、日ひにこそ、

月つきの姿すがた、

雲くもに永劫やうがう

空そらを渡わたる。

松露

紀伊は美^よき國^{くに}、白浪^{しらなみ}の
岸打^{きしう}つ音^ねと、巡禮^{じゆんれい}の
鉦^{かね}の響^{ひびき}を聞^きくこかや、
和歌^{わか}の浦^{うら}わにほご近^{ちか}き
その名^なもしるき紀見井寺^{きみいでら}。

寺^{てら}に通^{かよ}ひ路^ぢ松原^{まつばら}や、

世^よは火^ひの道^{みち}か、昔^{むかし}より
こ、よ涙^{なみだ}の道^{みち}ならむ、
哀歌^{あいかぎん}吟^{ぎん}じて吾^わが行^いけば、
泪^{なみだ}は落^おちてかぎりなし。

籠^{かご}と、熊手^{くまで}を、肩^{かた}に載^のせ
歸^{かへ}る少女^{をとめ}よ、露^{つゆ}踏^ふみて
明曉^{あす}はよぎらば、わが涙^{なみだ}—
晶^{きよ}き松露^{しょうろ}と化^{かは}りつつ

天風宛視

幸をぞ見出ん——數知れず。

可憐兒

春の水ゆく川岸の
淺緑なる柳かげ、
哀れ母子の乞食あり、
玉とめづらむ嬰兒を
襤褸に被ふ石の上。

げに初花のそが如く

天風宛視

あな愛らしの稚子かな、
綾や錦に包まらば、

世の名門の捨子かと

人や拾はむ、立寄りて。

このよの苦をばしるしたる

母のたもわに似もつかで

いと美はし子の顔も、

日々につれなき世の爲に

天をも怨む目とならむ。

衣は雪と墨にせよ

人に差異のあるべしや、

社会主義者の父と稱ぶ

カール、マルクスの名によりて

吾は抱かなむ、可憐兒よ。

雪女

誰が戯れにや小さき雪人形を作りて
道に捨てありしを

春の月下の雪女、

光り給ふが便なさに、

明かしませよとわが庭へ、

梅の傘して立たし、を、

ああ死にましぬ、此の朝け。

胸の思を春の夜の、

風にはせてかすかにも、

戸をしうちしか、夢うつつ、

さこそは(罪のいと深き)

泣きにけらしな雪女。

魂は涙の露にぬれ、

われは情の子にあれど、

人なるあだの身の熱に

わりなう脆き君なるを、
いたいけ淨き君なるを。

宵に見しま、雪女、

その名の如もうせにしよ、

美し姿ぞごめんに、

縁の赤絲の世になうて、

ああ雪姫は消わてけり。

しかな心よ、哀しみそ、
土なる人に死こそあれ、
もと形なき雪女、
曉の光に久方の、
天の界へはいにしなり。

傷める鷗

ふるさと捨てし旅人の、
海を渡るにふさはしき、
雲さだめなき大空や、
船を待つまを岸に立ち、
永遠の世の岸望みつつ、
思ひ遙かに眺むれば。

翅裂けたる白鷗の、

濤と嵐をあざけりて、
自由を歌ひ舞へるかな。
陸に心を破りつつ、
海へ進るる落人の、
顔こそ掩へ、わが袖に。

ラサールの死顔に

眠れよ、父よ、安らかに、

涙ぞまじる平民の聲、

雪の白布に蔽はれて。

國を愛し、ますらをは

花の少女の戀に果つ、

ああ死顔の美しき。

栗鼠と自由の棲むところ

今も獨逸の森の寺、

眼は星よ、口は鐘

「吾れ若し死せばいで同志よ

枯骨の中より起てよかし」

雲より濤に響くなり。

秋 雲

藍の大甕さかしまに、

空ゆ浮へる白雲あはれ、

北に、南に行方しらなく、

雁の一連——断れしに似れど、

天ぞ帶しぬ、無窮の鎖。

花の香しのぶ、乾泥の世、

若き血燃ゆる日本の子、

いま、雲望み感動かすや、

金風清ら劍觸れ鳴るを、

高きに登り衣振り歌へ。

色彩、虹は天女の夢や、

果敢なのならひ、ああ秋雲——

夕、白露——萬里の山葉。

人し舒べたる理想の絲ぞ

永劫こゝろに消きえじよ、世界よこそ蓋たはふれ。

天 露

(天満の街に佇ちて)

昔むかしは蘆あしの花散はなちりし、

今いまは塵ちりま舞まふ大阪たほさかの

天満てんまのまちの夕ゆふまぐれ、

人ひとや車くるまや、星ほしの世よに

響ひびき何なにぞと感かんずらむ。

想おもふ、天保てんぽう饑饉きん歳ざい、

彼の^か大鹽^{たほしほ}が孤憤^{こふん}して

驕^{たご}れる萬家^{ばんけや}焼^やきにしが、

さても其^その火^ひにいやまさる

いま烈^{はげ}しさの、熱^{あつ}き世^よや。

洗^{せん}心洞^{しんどう}にあらなくに、

墓^{はか}の底^{そこ}をし君出^{きみで}なば

かはる浮世^{うきよ}に驚^{おどろ}かむ、

争^{あらし}ふまちに、火^ひにあらで

涙^{なみだ}の露^{つゆ}や濺^{せき}ぐらむ。

嗚呼^{あゝ}、苦^{くる}める民^{たみ}のため

義人^{ぎじん}あるなし一人^{ひとり}だに、

淀^{よど}の河水^{かみづ}ひんがしに

よしや流^{なが}るも大鹽^{たほしほ}が

再^{また}び來^{きた}り嘆^{なげ}かんや。

土^{つち}にとかへる果敢^{はか}なさの

人の涙の雨よりも、
神よ、降らせよ天の露
慈悲の眼の一雫、
熱き世界のあゝ上に。

やまこ花

(支那少女に)

春の日紅く

空に溶け、

碧油湛ふる

江戸河や。

岸を髪垂れ

支那少女、

天風窺帆

やまごの衣袴よそひ

紙繪傘かみゑがさ

老國くにの歩あゆみの

履くつ遅たそき、

花はなの石いし中なか

なやましげ。

長安ちやうあんの大道みち

青柳あやなげ

今いまし櫻さくらに

感かんそゞや。

國土こくさじやう情じやうあり

旅たびの人ひと、

花くわ木はく涙なみだを

濺そぐべし、

天風窺帆

天風寤帆

君きみに一枝ひとえだ

折をれ翳かざせ、

大和女やまとをみなと

戯ざれ呼よばむ。

死出の湊

佇たえずむ市いちの西にしの空そら、

海うみの潮雲望しほぐものぞむとき、

あこがれをわがこころごる吾心、

浮うかぶ白帆しらほに身みをのせて、

はてなき海うみの波なみわけて、

獨ひこり去さらむと思おもふかな。

天風寤帆

塵の牢囚の軀を嘆き、
頭をあげて目を閉せば、
衢や、雲や、海きわて、
遙に遠くなほ遠く、
天つみ國の見ゆるかな、
死出の湊は静かにて——。

苦 熱

東の山を薔薇の華、——
西の山のは火の衣、——
天の王子の急性に、
大日輪のくるめきや。
われ南風に翔けのぼり、
黄なる軌道を跨にして、
永劫の金鎖ぞ手に断たむ。

地のうへ草木、葉は緑
 花は紅また白に、
 光の恵、美しくも、
 人し情ぞすさびては、
 罪の熟果のたゞ黒し、
 日よ、そは照す甲斐ありや。
 冥獄の爐の炎を懸くべけれ。

雲なす心、夜を戀ひ、
 涙に月よちぎりしも、
 今し乾きて火の眼、
 苦熱の日をば見る堪へじ、
 天なるなやみ、地のもだね—
 溶けて火柱、虹の如、
 此の世の外に
 燃わつ消えなん。

越中島の朝

(失業者の自殺)

鬼こそ堪へめ、人なるを、
長き苦しき労働に、
身は青草の細くのみ、
一たび肺を病みしより、
血を咯き逐はる杜鵑、
彼方此方どさまよひて、
今はすみかもあら悲し、

血に啼き狂ふばかりなり。

兩國橋の欄干に、
流るる水をながめしが、
夜の鷗の侶となり、
哀れや水に沈みけり。
越中島の蘆の邊に、
死骸は浮きぬ、そのあした、
嗟吁、惨はしや聞くさへに、

これぞ労働く人の果。

感應

火の身ぞ登る夕陽の丘、

わが秋髪を掴みつ抜けば、

松葉とはらら、遠雲うごく。

紅き涙の頬よ染むるに、

雨は飛び来ぬ、——袖をも濡れど。

愁に堪へず、青草の如く、

古木、抱いて哀歌誦ふや、

樹隨悲みたち顫へ、

小鳥、糸づた、鳴りも止まず、

天の琴搖れ、嵐吹くなり。

見よや、擴ぐる雲の翼、

を暗き胸ゆ生れも伸びし—

闇こそ蔽へ市の瓦、

涙、恨の雨の夜長がし。

雪

狂ふ血潮の火となりて、

あ、吾胸の苦しさを、

彼の雪白き山の嶺、

罪に汚るる塵の身を、

雪底深く埋めてむ。

智慧と力に誇るてふ

人にしあれど雪分くる
鹿や兎の技なきに、
遙けく山に對ひては、
浄土踏みぬ嘆あり。

寒き瓦に、優しげに、
吾を見下す白鳩よ、
雪にもまがふ汝が翼、
やよや、翔けれよ、かの山へ、

雪をぞごりてわが頭—
熱き頭に灑落げ白鳩。

遼東の墓

ああ、雲血くもちなり、滿洲まんしゅうの野、
 砲火はうくわ、東ひがしに西にしに沈しづみて
 いま、雪鳥ゆきどりの舞まひつ戦たふ。
 日本ひのもと、露國ろこく、劍拔けんぬき起たちし
 軍兵つはもの十萬、花はなの黃白くわうびやく
 秋あきも亂みだれつ、冬ふゆも散ちりぐ、
 屍しかはね、石いしと凍こほるか百里ひゃくり。

國荒くにあはされて悵歌うたもあらず、
 北風ほくふう凜々りんく、劍氣けんきを含ふみ、
 氷こほりに爛らんと野犬のいぬの紅舌ししたの
 牡丹大肉ぼたんたいにく、群呼むれよぶところ、
 仇あだと敵てきとの骨ほねは八絡やがらみ――
 『造化ぞうくわ』の手てなる物體ものたいぞ一ひとに、
 運命さだめの繩目なはめ朽くちて土塊つちくれ。

榮譽、銃擔ひ、祖國の空へ
 歸休す兵士、あゝ君雪に
 戦友は白髪、野に死す偲べ、
 歡喜——爐の火、涙に消わん。
 さあれ、平和は日露の天地、
 陸ゆ春風、島邊ゆ波に
 思情ぞ寄せね——遼東の墓。

鳥屋の娘

自由の里の戀しさに、
 悲しき歌にことよせて、
 ゆるしを得んと「運命」の
 前に琴ひく籠の鳥。

ある日、乙女の花の影、
 歌をば楚々と聴き居たり、

人は狂女と名によべごと
もつれし心——千々の糸に、
いかに響を傳へけん。

その夜、少女は露起きて、
空滿つ星をかぞへしが、
柔し小指の籠の戸に、
鳥はこりと飛び去りぬ。

身にふりかゝるいましめの
鞭はきびしき雨霰、
たざりて落つる紅涙の
袖に流れて瀧となるらむ。

火 國

我われは火國くわこくの

男をとこなり、

君きみや火國くわこくの

女をんななり。

ああ美うるはしき

日ひの本もとの、

天あまと地つちにぞ

感謝かんしゃせむ。

胸むねに情炎じやうえん

燃もわて蠟ろう、

石いしの離さかりて

在ある堪たへじ

白しろき腕かひなを

環わに捲まいて、

鹿かの子この如ごとく

蝶てふのごと。

裳すそは花野はなのの

露つゆに濡ぬれ、

目めには彩あやなる

雲望くもぞむ。

行方ゆきへな問こひそ

黒髪くろかみの、

君きみよ長ながくも

春はるをいかに。

新聞幼工の歌

浮世うきよの様さまを人ひとの手てに
集あつめて組くみてうつしては
人ひとに見みすなる新聞社しんぶんしゃ、
日ひ々々にかはるは理世うらしまや
人ひとも機き械かいも忙いそしけれ。

塵ちりと鉛なまりの工場こうちやうに、

組くみし活字くわつじをくづしつ
朝あさに勤いそ勉しむ小童わらべあり、
仕し事ことを問とへば『解版かいはん』と
答こたへやすらむ、振ふり向むきて。

人ひとの心こころと、世よはいつも
勞働はたらく兒等こらに寒さむけれど、
冬ふゆは活字くわつじの冷つめたさに
凍こほる指頭ゆびさき赤あかからで

インキに染みて眞黒なり。

顔に墨をば塗られては

笑ひもすれど、過失てば

鐵の拳のあら痛たや、

泣けば、字拾ふ文撰や

植字の聲に消れてゆく。

ここも浮世か、そが中に

別くる活字の文字よりも

早く憂世の憂の字を

知りて兒童ぞいと狭き

學びの校に習ふなり。

仇浪

(法界節の女に)

柳やなぎの絮わたは誰たが家いの

瓦かはらに雪ゆきよ西東にしひがし

風かぜに吹ふかれて足拍子あしびょうし

謠うたひて來きにし旅女たげなん

清すずしき音ねもしめやかに。

君きみは千人ちたひの花妻はなづまぞ、

君きみは百家もっげの華賓まろうきぞ、

腕かひなに抱いだく愛琴あいきんを

撫なでつ、歌うたふに、目めざまして

泣ないてくれるは糸いとばかり。

柱はしらに繋かる髪かみ、縁わにし

眉まゆふり身みふる鶯うぐひすは

千戸ちまんど萬戸まんごのまめ女房にようば、

編笠あみがさ覗のぞく燕つばくろは

樂たのしき夢ゆめの小娘こむすめよ。

玉たまの肌はだをさぐられて

心こころの海うみの騒さわぐらむ、

枕まくら、藻床もこもぬれくくに、

白しろき首うなじは水鳥みづとりの

きみ仇浪あだなみに浮うき沈しづみ。

なに世よは笑わらへ一枚ひきまいの

紙かみよ歌うたひて破やぶれずば、

月つきの小琴をこも地ちに碎くだけ、

袂たもとはたいて雲くもの如ごとし

飛とんで行ゆけかし月世界げつせかい。

詩 魔

ほつちぎす。

櫳かしの樞くるる戸こ

摧くだきつ出づれば、

星ほし、森閑しんかんと、

闇やみばかり。

劍けんのころ、

卯うの花垣はながきね根

分わけ爪つまた立てば、

眉まゆの三日みかづき月

雲くもを斬きる。

人ひとのころ、

廻めぐりて春舍つきや

美よき妹いもは居ゐず、

柳つなぎの濡ぬれて

天風魔帆

露の髪。

詩魔のわざ、

戀か狂か

心に問へば、

地籟、天籟

我も無し。

詩と糸

櫻はな散る

墨田川、

岸の草座し

物思ふ。

水は波だち

流るれど、

天風魔帆

世をし謀るの
策成らず。

水の上より

禽の羽か、

工女の哀歌の

響くなり。

紡ぎて白き

糸生れど、

胸に血に編む

詩はみだれて。

海に走りて

心は金箭、脚は雲、
風に走り來、海の岸、
夕陽は沖に沈みたり、
巖叩いて悲歌すれば
大和島根も環に揺れぬ。

ああ、世を棄てし、血を捨てし、

涙掌に盈ち熱情を
神にふりさけ灑ぐいま、
海なる空へ虹なして
驚きて散る寒千鳥。

髪も亂る、藻もみだれ、
怒る男波や、泣く女波
玉吐きのぼる吾胸へ、
小石、小貝のたゞ濡れて

捲きては返し返り捲く

浪よ黙しね、トリトンの

笛は万古の響なし、

去りて巨舟の腹を撃て！

わが血、わが歌、東海の

島をし洗ふ秋と知らずや。

雲 甕

宵の稻妻、—— わが思

天の大甕打ち割れて、

雪噴く雲の一すぢは

南へ流れ血に似たり、

東、夏日はの照るや。

ああ死ぞ知らぬ天人の、

淨き血汐かこれやこの
雲の一杯吸らまし、
胸は爛るも春の野の
花燃ゆばかりたもしろき。

理想の小壺いづこそや、
天に秘さば抱きても
其の白熱の一雫、
舌は焼とも波頭

激しき歌ぞ冴ゆるべき。

さあれ、萬古の雲の瓶、
仰ぐほのく空の人、
下に可憐しき朝顔の
紅、紫に盞の
露を盛りてぞ匂ふなり。

秋 思

(遙に大鹽先生の墓に)

浪華の市はよしあしの

道頓堀の繪看板、

新町橋の青柳、

戀ふは艶人、われはまた

成正寺なる暗き墓。

そも雨の晝、雪の夜、

思ふは高き石碑

わが足跡の消にしも、

海鳥岩を蔽ふ如

こゝろは通へ西百里。

淀の河水にしにゆき、

雲は南にはた北に、

自然は花も變らねど、

洗心洞を大鹽が

いつ義ぎに燃もわて出いでんやは。

あ、山やま青あをく、野のは廣ひろし、

いづこか骨ほねの捨すてどころ

我われも小ちいさき墓はかとなり、

日本やまとの國くににたゞ二ふたつ

君きみが後しりへに唄うたはれむ。

詩人塚

ゆふ日ひ花はなささく

死しの丘をか、

古塚ふるづかひ一つ

淋さみしき、

血ちに『人間にんげん』と

指書ゆびがく、

胸むねはほのめき。

美男よろしを

振ふよ長しふるなが

蔦髪つたがみ

相見あひみて立たちつかつ泣なく。

昔思むかしをもへば

秋風あきかぜ

石いしの口くちにも

熱ねつの語ご、――

國くにの運命うんめい

人ひとの生よ、

市いちを笑わらひぬ

からく、

雲くもは残のこの

詩うた卷まき

舞まひつかへるも、天あめより。

春恨

(水死の女工をうたへる)

雲の輦くるまは

西にしまた南みなみ

春戀はるこひ、歌うたに

徜徉さすらひすれば、

あれ、美人よろしめや

浪なみに赤裳あかもと、

墨田すみだの堤つみ

袖垣そでがきぞめく、

とみる藻髪もがみに

花はなびら簪かんざし、

感情こころ染めざる

空むなし陶物すゑもの。

沈しづむ哀女かなしめ、

鷗かもめは見しや、

曉あけの鐘かねにも、

夕の唄に、

紡績ぐ糸より

短き命、

水に工みし

女なりしか、

生れは草家、

中は都に、

果は泣きつつ

海の宮居へ――。

海王

行手、穂青の海原や、

あ、情縁の糸たちぬ、

袖に悲しき風の音、

月の亂雲、秋雁も

斬りて走るに似るやわれ。

緑の丘よいざさらば、

聲ぞ一つに海の鳥
 新の天は開けたり、
 わが舟たつる大吹雪
 肩に力の火の翼

出でよ海靈、伏せよ巖、
 そに「人間」と刻みなば
 濤は嘲みつ碎くかも、
 出でよ海魔、髪も濡れ、

女と絞りぬ昨日こそ。

波上家ありほのぼのと、
 蒼きは戀し父の顔、
 白きは戀し母の面、
 生肌躍るももかすの
 わが同胞ぞうるはしき。

湛ふ瑠璃酒の巨甕や、

ここぞ古郷、酔ひぬべく

花も摘むべく波の路、

白銀の宮、劍の森、

幻彩の蜃氣樓。

霞隠れに白帆して

駛るは強き海賊か、

寶珠はありや、富ありや、

美女載すも、我の前

息ある影ぞゆるしねじ。

海をぞ裂きし血に染むる

千丈の藻はいづこにか、

いで荒潮のただ中に

捲れむ藻にし火の男、

燃ゆるがゆかり草と人。

めぐる死海の冬の夜に、

霜の舟べり腕かけて
廣き死胸にひと雫
魚は愁の目をひらけ
振るや尾鰭に星散らふ。

漂浪の兒の熱情の

虹を萬里に懸くる時

氷の山は崩るかな

千年の恨解けぬべく

流るも元の春の水。

かの天上を壓へずて

わづかに聖き海の王

望むに、陸よ、人よ、塵

ああ我れ勝てり、終焉は

輓歌うれしき濤の音。

大鹽中齋先生の
靈に告ぐる歌

明治廿六年四月六日大坂中之
島公會堂に於て開きたる日本
最初の社會主義者大會にて朗
吟したるもの

時維^{ときこ}天保^{てんほう}八年^{ねん}の

春^{はる}は二月^{ごわつ}の十九日^{じちゅう}、

中齋^{ちゆうさい}先生^{せんせい}大鹽^{おほしほ}が、

闇^{やみ}の秕政^{ひせい}を憤^{いきほ}り

民^{たみ}の困苦^{こんく}を救^{すく}はむと、

洗心^{せんしん}洞^{どう}に燃^もえ立ちし

勇壯^{ゆうさう}義舉^{ぎぎよ}の紀念^{きねん}日^びぞ。

天^{あめ}なる聖^{きよ}き靈^{れい}の火^ひか、

地獄^{ぢごく}の底^{そこ}の罰^{ばつ}の火^ひか、

社會^{しゃい}の腸^{はらわた}を火^ひにかけて

いざや腐敗^{ふはい}をこそめむと

血性^{けつせい}男子^{だんじ}大鹽^{おほしほ}が

至誠一念火を放けて
鬼神感哭せしその日なり。

春なほ寒き朝風に

『救民』の旗翻へし

五百の男兒堂々と

賄賂貪ぼる有司等や、

餓ゑたる民に情なき

富者の酣睡さまたんと、

鳴らす大砲、叫び聲。

聞けや、暴吏等、富豪よ、

涙もあらず血もなれば、

無觸無感の死屍と

汝の身をば焼きやらむ、

慾や深くば灰の山、

黄光ほしくば火ぞやらむ、

轟く大砲、見よ焦土。

嗚呼、燃わし火や、銃の音、
夫れも昔の夢と消れ、
今は人謂ふ文明の
世とはかはりし大都會、
砲の音より烈しきは
車の響、人々の
競ひ争ふ修羅の火や。

黄金は照らす政治界、

地主、資本家跋扈して

社會の蔭に民ぞ泣く、

哀れ今の世君あらば

悲憤三斗の血を吐かむ、

嗚呼、金權は地に勝ちて

正義、自由は死せんとす。

陽春、花は開けども

社會の底は冬にして
 降り積む雪に壓せられ
 憐れ民草萌わいせず、
 無殘蓄の美はしき
 貧家の少女金ゆゑに
 操の花ぞ破らるる。

同じ島根に住みながら
 人と人どが殘害す、

皇天何ぞ無情なる

天保の世のそれならで
 いま東奥に饑饉あり、
 嗟吁此時に君あらば
 怒りて天も地も焚かむ。

今歲三十六年の
 春も四月の六日の夜、
 墓場に君を起さむと

君を演壇より呼ぶならじ、
枯骨は死より甦らむや、
再び君を火の中に
惨死さするに忍びむや。

西に東に漂泊ひて

よしあし知らぬ浪華なる

我れ大坂に來し夕、

入日の雲を見てしより

ただやかならぬ我胸や、

夕焼雲を仰ぐたび

胸はもわては君慕ふ。

爪先立てて眺むれば

君が焼きたる難波橋、

天満は彼方、公會堂

吾等同志が世に慨し

聲を擧ぐるの社會主義、

天風魔帆

一五二

怨恨盡うらみつきざる君きみが靈れい
この夜よこの會くわい來きたりたすけよ。

天風魔帆終

明治廿九年十二月二十八日印刷
明治四十年一月一日發行

定價金參拾五錢

郵稅四錢

著者 兒玉花外

發行人 熊谷千代三郎
東京市本郷區弓町一丁目二十六番地

印刷人 岡千代彦
東京市芝區新櫻田町十九番地

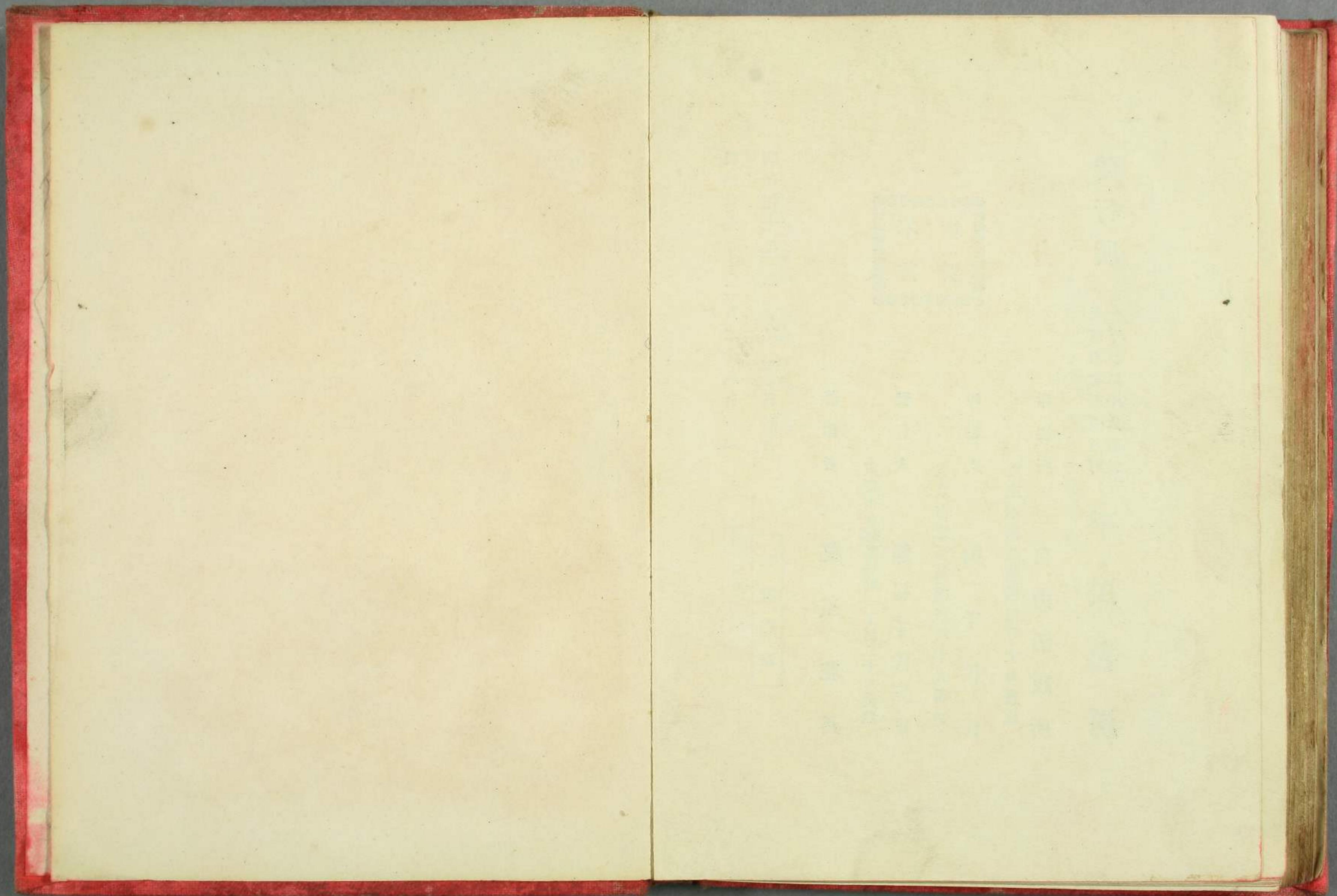
印刷所 自由活版所
東京市芝區新櫻田町十九番地

不許複製

發行所

東京市本郷區弓町一丁目二十六番地

平民書房



7
4
1848
4
11
x

mouth
mouth,
Bisit vialix